

札幌大学総合研究 第4号 (2013年3月)

〈論文〉

室生犀星における「キリスト教的感覚」¹⁾ 及びその意義

劉 金挙・単 妮娜

〈要旨〉

「宗教学的宗教観念」²⁾の確立と普及もあって、トルストイ、ドストエフスキーの文学作品をはじめとするロシア文学が疾風怒濤のように日本を風靡する中、日本に伝わったキリスト教は、多くの作家に多大な影響を与えた。コンプレックスに苛まれた上、寺院育ちの室生犀星も、少年時代に受けた聖書、殊に放浪時代に受けたロシア人道主義文学の影響で、「キリスト教的感覚」を抱き、生活も創作也大いにそれに影響された。しかしキリスト教への信仰を通じて贖いを求めるクリスチャンとは異なって、「キリスト教的感覚」を頼りにした彼は、創作を通して、生活の浄土を見つけたり精神的向上を求めたりした。

〈キーワード〉

室生犀星, キリスト教的感覚, ロシア人道主義文学, コンプレックス, 向上意欲

はじめに

コンプレックス³⁾に苛まれた上、寺院育ちの室生犀星は、少年時代に受けた聖書、殊に放浪時代に受けたトルストイやドストエフスキーの影響で、「キリスト教的感覚」を抱き、生活ばかりではなく、作品也大いにそれに影響された。しかし「決して使徒ではない」(〈祈祷〉大3・4。本稿において区別をつけるため、引用は「」で、文章名・小説名などは〈〉で示す)彼は、「信仰までは至ら」⁴⁾ない、言い換えればキリスト教を通じて贖いを求めたのではない。コンプレックスからの脱出意欲は、彼をしてキリスト教を頼りに創作を通じて生活の浄土を見つけたり精神的向上を求めたりさせた。

本稿は、犀星におけるキリスト教とドストエフスキー受容についての分析を通じて、彼における「キリスト教的感覚」とその意義を検討しようとするものである。

一、犀星におけるキリスト教の影響

「犀星は父に誘われて尾山とともに加藤正雄を訪ねた。加藤正雄は犀星を寺の子と知ったうえで自宅の聖書購読会に加えてくれた。三人は聖書と讃美歌集をもって、いっしょに通った」⁵⁾とあるように、「犀星の聖書受容を考えた場合、それは明治四十年頃まで遡ることができる。」彼本人は、洗礼こそ受けなかったが、二葉会や北辰詩社を通して知り合った田辺孝次、幸崎伊次郎、尾山篤次郎など、金沢教会で洗礼を受けた文学の仲間達に影響された上、「当時の金沢における芸術文化を愛好する若者たちにとってキリスト教（もしくはそれを象徴する聖書）が与えた影響は少なくない。」⁶⁾つまり人道主義が普及し、それに深く影響された金沢の、いやむしろ日本の文壇へのキリスト教浸透の構図を指摘したこの引用から、東京に出る前の青年犀星は、既にキリスト教に深く影響されていたことが伺える。

明治四十五年、「犀星は本郷の縁日で五銭で『聖書』を求め、他に読むべき本がないので明けても暮れても読んでいたらしい。」⁷⁾しかも、「私の室に一冊のよごれたバイブルがある（中略）私は暗黒時代にはこのバイブル一冊しか机の上にもつてゐなかつた。寒さや飢餓や病氣と戦ひながら、私の詩が一つとして世に現はれないところに、私はこのバイブルをふとこころに苦しんだり歩いたりしてゐた」という、『愛の詩集』のこの〈扉銘〉から、この時期彼が精神的な頼りにしていたのは、〈一冊のバイブル〉であったことが分かる。大正三年二月、長く文通した萩原朔太郎の故郷を訪ね、前橋滞在のことをメモ風に記した随筆〈祈祷〉からも、この時期の犀星にとってのバイブルとキリスト教の意義が読み取れる。例えば「毎日毎日バイブルを読みくらしてゐる。読んでも飽きたることの無いものである。好きな好きなキリスト。センチメンタルでわがままで温和しくて女のやうなキリスト、すこしく嘘つきで真摯なキリスト、柔らかな乳白の頬にしんみりとして喜びを覚える」（〈祈祷〉）。また、前橋を去る時、ずっと欲しくて思い求めた聖母像の板張りを朔太郎からもらったそうである。

そればかりではなく、『白樺』に一年余りに亘って〈ドストエフスキイ〉を連載する中、「長与善郎氏や白樺派の人々、その後では室生犀星氏原久一郎氏から私に寄せられた身に余る激励の御言葉は、私に忘れ難い感激と感謝の念を与へた」⁸⁾と、作者の新城和一が述べたように、犀星はドストエフスキー縁の物に深い関心を寄せて、貪欲的にキリスト教や人道主義の知識を吸収していたことが分かる。

キリスト教に対する熱狂は、犀星をして研究という程度に至らせ、大正三年「人魚詩社」といふ詩社が、山村暮鳥、萩原朔太郎、室生犀星三氏によつて創立された、主として詩、宗教、音楽の研究を目的とする」（『詩歌』七月号消息記事）ことになった。現にこの

頃、萩原朔太郎の影響で、トルストイ、ドストエフスキー等の作品を耽読するようになっていた犀星は、聖学院の教会にも通い、ロシアの人道主義とキリスト教に夢中であった。

(大正五年)四月頃、キリスト教に関心を寄せる。「詩歌」五月号に、前田夕暮が「編集記事」で、「室生犀星君のキリスト教に就ての評論も次号からの。」と予告するが、実現せず。⁹⁾

しかし、この実現できなかつたものは、大正七年九月、『トルストイ研究』の〈第二ドストエフスキイ〉という特別号に、〈ドストエフスキイの描ける女性〉という評論で実った。おまけに、これは、『白樺』にドストエフスキー論を連載したことで名が知れ渡った新城和一を初めとするドストエフスキー研究諸大家の文章にも併置されたものである。

もちろん、「私は人道主義でも愛の詩人でもない。私は一個の汚れた世界で私の知る限りで一番汚れたものだ(中略)私のこの苦しい求信の道、そこにゆきつくまで私は生活する」(〈手記〉大8)とあるように、「『聖書』やキリスト教は「信仰」ではなく、生の指針として、また、文学的な感興のための措置として」、彼はコンプレックスの脱出を人生の目標に、「この苦しい求信の道、そこにゆきつくまで」¹⁰⁾ 創作を続けていたのであった。

自分は田端に越した(中略)自分はトルストイとドストエフスキイには感心し、勉強をしなかつた根津時代とは反対に読み出した。最後の『戦争と平和』を読み終へた時分は、何か歩き方も異ふやうな気がし、ピシピシと自分は何でも無いものに感じた。

小川の音さへ新しく聞こえ出し、自分の進歩を感じた。(〈弄獅子〉)

と、大正五年七月犀星は田端に転居し、同六年四月『感情』九号に詩くドストエフスキイの肖像〉を發表し、さらに十月『文章世界』に同名の文章を寄稿したことは、彼におけるキリスト教、ドストエフスキーの受容と創作との関係の理解にはよい手引きである。その強烈なドストエフスキー愛は、後で詳しく見ていくが、ずっと彼の晩年にまで続いた。

二、犀星作品に見る「キリスト教的感覚」

寺育ちで、「汚れた」だけに自己救済を求めようとする渴望が原因で、犀星は「キリスト教的感覚」を抱き、作品において純や聖を求めてきた。しかし、明治時代の彼は、キリスト教からまだあまり影響を受けていなかったゆえ、「此の村の教会淋しいクリスマス」(明41・12・15)と、「冬の月十字架光る教会堂」(明44・1)のように、俳句に出たキリスト教めいたものは少なかった。それに対して、後にキリスト教に深く影響されたこともあって、「俳句よりどれだけ詩の世界が広く大きく、また深かつたか知れない。俳句では詠みつくせない微妙な心や気分の波動が、そこでは殆ど完全に表現することができる

やうな気がした」（〈草の上にて〉）から俳句より詩へと、さらに「詩で表現できない複雑な心理的なものや、非常に時間的なものなどは、皆散文（小説とも言える）の形で盛り上げる」（〈編輯記事〉『感情』31号）から、詩から小説へと転身したために、詩と小説に「キリスト教的感覚」の物が多い。

犀星におけるキリスト教の影響は、主にロシアの文学者達を介して受けたものなので、ここでは犀星におけるドストエフスキー受容を突破口にして分析を進めようと思う。その受容には、「大正五年前後と昭和十年前後とに二つの山があり、第一の山から第二の山へと伸びる線は、ソーニャの明るい愛の光からスヴィドリガイロフの暗い悪の影とへ突き進んでいる」¹¹⁾。前の山は主に詩に、後の山は主に小説に影響を与えたという。しかし、実は山は二つだけあるようだけれども、キリスト教はずっと彼の後の人生にも響いた。

（一）犀星詩における「キリスト教的感覚」

「あの時分にドストエフスキーやトルストイを読んでゐなかつたら、あと五六年くらゐ私の成長するところが遅れてゐたかも知れないのだ」（〈書物雑感〉『評論』昭9・7）、
「トルストイの書簡や片言零語まであさつた僕は、ドストエフスキーの小説を自然に耽読するやうになつた。この小説は僕に人道主義やら何やら分かんが、妙な文学の中にもあるやうな宗教心をあふつてくれ、僕はさういふ傾向の詩ばかり書いて暮らしてゐた」（〈愛読史〉『新潮』昭9・4）とあるように、大正五年中における熱心なドストエフスキー受容の結果、犀星の詩作は、キリスト教とロシアの人道主義作家に大いに影響されている。

第一に、直接的引用や感想を述べたものが挙げられる。『愛の詩集』の巻頭に、〈詩篇百二〉と、「熱い日光を浴びてゐる一匹の蠅。この蠅ですら宇宙の宴に参与る一人で、自分のゐるべきところをちやんと心得てゐる」というドストエフスキーの言葉と、〈哥林多前書四ノ二十一〉が収められ、巻末に〈ヨハネ伝第三章二十九〉と、〈ネルリの肖像について〉と、〈エレナと曰へる少女ネルリのこと〉が収められている。とりわけ、前にも引用した「私の室に一冊のよごれたバイブルがある（中略）私はこのバイブルをふところに苦しんだり歩いたりしてゐた」という『愛の詩集』の〈扉銘〉から、この時期の犀星にとっての聖書の重要さがわかる。それから、『第二の愛の詩集』は、巻頭には「一人を愛しようとするとき、その容貌や精神の上の影響がそれを為さしめないときがある。けれども人類としては深くすべてを熱愛する」というドストエフスキーの言葉を引用し、巻末に〈トルストイに描かれた女性〉、〈ドストエフスキーに描かれた女性〉など四編の感想が付録され、トルストイ、ドストエフスキー、アルツイバーセフ、ゴーゴリー、ゴンチャロフ

など、当時犀星が親しんでいたロシア作家のことも出されている。

次に、色濃く影響されたものが挙げられる。『愛の詩集』、『第二の愛の詩集』にだけでも、「マリア像のある壁の前に座つてみて」、「熱病のやう」に追い求めたく万人の愛を、「ドストイェフスキの顔を見」ながら過ごしていたくまた自らに与へられる日を、「精神の美しさにみなぎつ」ていて眺めたくドストイェフスキの肖像を、「カラマゾフ兄弟の中の／長老ゾシマの悲しげな臨終を読んだりし」たく父なきのちを、「トルストイや／ドストイェフスキの物語にあらはれてくる美しい女性」への「思ひをめぐらした」く露西亜を思ふを、く初めて『カラマゾフ』兄弟を読んだ晩のことなどがある一方、トルストイ・ドストイェフスキの影響なしには語れない詩篇もたくさんある。「その正しさを感じたさに／神のあどけない瞬間を見たさに／きたない自分をふり落とすために」、「自然の中に居る」子供に近づこうとするく子供は自然の中に居るを、娼婦の床を出た「自分」が彼女の瘦せた体に「あらしのやうな恥づかしさ」を感じ、彼女の善良さに打たれてくこの苦痛の前に額づくを、「恥知らずの餓鬼道の都市」のくある街裏にてを、「僕は毎日いやしいものを追ひ出す／清潔なさわやかなものをとり容れる」く汚れにも生きられるをなどがそれである。

中でも印象深いのは、くこの道をも私は通るををはじめとする一連の「娼婦愛物」¹²⁾である。「銀貨一枚で裸にもなる女等／君はこのやうな混濁の巷で／聖母マリアのやうな／美しい顔をどうするつもりだ（中略）／いまこそ私もこの道を通る／お前達の送る毒の花をも／自分は優しく接吻して上げる」とあるように、魔窟にうごめき、落ち込んだ泥沼から這い上がることもできずに苦しんでいた女たちに親しくかけた上記の言葉は、彼女らに寄せた犀星の深い愛の表れである。後でまた見るが、犀星の「娼婦愛」は、ずっと晩年の創作にも延々としている。

しかし、「私が愛の詩人であり、人道主義者のやうに見られるのは、いつも私の不愉快とするところである。私は、それらの孰れのものでもな」（く『愛の詩集』再版について）いと、犀星本人が述べたように、彼は決して人道主義の詩人ではなく、この愛も決して人道主義的なものではない。銀貨一枚で体を売る女たちの苦しみを自分の痛みとして感ずるとともに、彼女らに犀星はくいまこそ私もこの道を通るをという共感を抱いたのである。殊に、この詩の後に、「『私が神様を離れてどうして生きてゐられませう。』早口に力を入れて彼女は囁いた。急に輝きを帯びた目をちらと彼に投げて。そしてラスコオリニコフの手を堅くしめつけた。ドストイェフスキ。」と、ソーニャのイメージを思い浮かばせる『罪と罰』の一節が加えられている。「お前達の送る毒の花をも/自分は優しく接吻して上げる」ことの裏に、『罪と罰』の中の、惨憺生活を送りながら、家族のために徹底

的な自己犠牲までもするという自らの生き方で、殺人罪を犯したラスコーリニコフに人間回復を促した娼婦ソーニャの影がある。孤独と貧窮に苛まれた東京放浪中、ドストエフスキーに深く感化された犀星は、娼婦達を慰めを求められる唯一の拠り所としていたわけである。

しかし、注意すべきなのは、この時期にドストエフスキーを耽読し、聖書を学んだ彼がとったのは、あくまで犀星流の読み方である。彼がドストエフスキー作品からまず選び取ったのは「虐げられし」人々であり、その痕跡は『愛の詩集』に添えたくエレンと曰へる少女ネルリのこと」という散文などに伺われる。〈ボンタン哀詩〉の少女ふぢ子に、すでに我々はネルリの面影を二重写しに見ることができる。¹³⁾

(二)犀星小説における「キリスト教的感覚」

犀星の小説家としての才能は、〈凶賊TICRIS〉（『アララギ』大3・10）などの詩に伺えるが、その才能を発揮させるきっかけとなったのは、ドストエフスキーの小説であるとの指摘¹⁴⁾があるほど、犀星の小説は大いにドストエフスキーに影響されている。前に見たように、犀星の関心は、ドストエフスキー受容の第一の山の時ソーニャに奪われていたが、第二の山の時スヴィドリガイロフという悪漢に移されたという木村氏の指摘があるが、実はそれはずっと彼の小説創作を底流していた。

1. ドストエフスキー受容の第一の山における「キリスト教的感覚」小説

先ず、大正五年前後にできた白樺派を先導とする人道主義的文学潮流とともに高まった人道主義的「ドストエフスキ熱」に影響されたもので、おおざっぱに見れば、三種類がある。

第一に、東京放浪中の、感情と肉欲との間に板挟まれた生活を題材にして、「虐げられし」人たる娼婦を描いた「娼婦愛」小説である。この類の小説には、直接娼婦のことを描く〈美しき氷河〉（大9・4）、〈蒼白き巢窟〉（大9・3）、〈猫族〉（大10・1～2）や、複数の男女の複雑な人間関係を描く〈孔雀と痴人〉（大10・9）、〈走馬燈〉（大11・2・21～5・20）や、男に裏切られた女の失望や憎しみを主題とする〈こはれたオルガン〉（大13・1）、〈時計〉（大13・1・5～12）等がある。主人公は、何れもソーニャとネルリなどの貧困と逆境に耐えながら生きている薄幸で孤独な女性達を髣髴させた人物である。ここで〈蒼白き巢窟〉を例として分析してみる。

〈蒼白き巢窟〉では、娼婦のおすゑと娼婦になったばかりの女と娼婦になろうと決意したもう一人の女と、三人の女性のことが描かれているが、共通しているのは、三人とも

「清純」を失っていないことである。「私」はいつもおすゑのところへ通う。なぜなら、おすゑは「眼はいつも夢でも見てゐるやうにぼんやりして」いて、「持前明るい気質」を持っていて、「善すぎる」からであった。それに対して、娼婦になったばかりの女が、「健康をむだ費ひにすること、初めて判りかけた異性の面白味や淫蕩に引摺られてゐるだけで」、清純を失いかけているが、それをじっと見てはられない「私」に叱られ、諭されたところ、「明らかに其心の内にもう彼の処女時代の気もちや、すなおさがそつと浮かんできたやうな澄んだ、おつとりした目つきに還」らせた。とりわけ仕事がないところへもってきて、病にかかったお婆さんの介護もしなければならぬ、米一粒もない状態に放り出され、仕方なくて娼婦になろうと踏み切った女を、「私」は誠意を持ってもてなし、救済した結果、自分が娼婦になろうと決意したことを、「どうしてあんな恐ろしいことを平気でしに出たか自分でも考えるとぞつとしますの」と反省させ、その女に清純を保たせた。女を救済するため、女との間に何も起こらなかった「私」が女へお金を上げようとしたら、この女は「決してあんなに戴くわけはありません」と、頑なに断るよう食欲のない清純な女であった。

第二に、自叙伝色の濃いものが挙げられる。暗黒な生活をしてきた犀星にとっては、宗教関係のものは何よりの精神的な救いであった。〈一冊のバイブル〉(大8・9)では、下宿の部屋から前の借主の残した一冊のバイブルを見つけた時、心に応えて、「烈しい都会の私の漂泊的な生活がだんだん深みに陥ち込んで行つた。けれども私はいつもあのバイブルを手元から離さなかつた(中略)いつも机の上に置いたり、ときには、清い朝、声高く朗読したりした」ほど、熱烈にこの本が好きになった。なぜなら、「詩と文学とは、『聖書』なども含めてこの人に文字通り救ひであつたかもしれない」¹⁵⁾からである。したがって、父の葬式のために帰省する時、たまたま列車で隣り合った女が、「この都会の深い泥濘の底へ墮ちていつた」ことを知り、大事にしてきたその本を、「いまこそそれを返さなければならないやうな気がした。あの女のひとが読まなくとも、持つてゐてくれるだけでいい」という考えで、女へ送った。

最後に、『旧約聖書』に材を得たものである。久保忠夫氏の『室生犀星研究』は、〈二人の娼婦〉(『日本詩人』大10・11)は〈列王紀略(上)〉第三章十六節以下に拠ったもので、〈緑色の文字〉は〈ダニエル書〉第五章に拠ったもので、〈二人の娼婦〉においては、ドストエフスキーの『罪と罰』第五編四に出た「汚した大地に接吻しなさい」という箇所感動し(現に〈ドストエフスキーに描かれた女性〉には「ラスコオリニコフは大地に接吻した」という言葉がある)、そのところを「病婦は、もはや水面を凝視することができなかつた。ソロモンの闕下の土に口づけをして謝罪した」と活用したと指摘してい

る。それから、〈緑色の文字〉を書くにあたって、当時の聖書の言葉も多く借用したことは、聖書に対する熟知を物語っている。「初期詩作品に見られる強い宗教性こそ感じられない。だが、それだけ彼の身近に聖書があったことは紛れもない事実であり、信仰までは至らなかったが、彼が聖書と対峙した結果生み出された童話であるということが出来る。」¹⁶⁾ これらの物は、「結局、おはなしであってそれ以上のものでもそれ以下のものでもない（中略）しかし、犀星の小説の展開上の意義は必ずしも小さくはない。昭和十六年前後の王朝物の先駆をなすものであり、ひいては『かげろうの日記遺文』（昭34・11）への道を開いたからである。」¹⁷⁾

この時代、初期抒情詩と同じように、汚れた身をもっていると信じた犀星は、人間の魂を救う存在としてキリスト教とドストエフスキーを理解し、ソーニャが身体を売りながらもそこに聖性を湛えていると信じて、汚濁した世界を純粋な魂を持って徹底して生き抜くことで聖性に到達するという信念のもとで、逆境に耐え忍んで文学創作を志し、しかも徹底的に文学創作に専念することを貫き、それによって聖性に近づこうと頑張り続けていた。

2. ドストエフスキー受容の第二の山における「キリスト教的感覚」小説

人生をいろいろと体験し、それから「シレストフ的不安」の流行とともに新たにできた昭和十年前後の「ドストエフスキ熱」の広がりの中で、「ドストエフスキ受容によって吸収した養分をもあらたなエネルギー源としつつ、作家としての脱皮、前進を」¹⁸⁾ 成し遂げた犀星は、第二の山において、昭和十年前後「市井鬼物」を創作した。代表的なのは、〈あにいもうと〉（原題〈神々のへど〉 昭9・7）、〈復讐〉（原題〈人間街〉 昭10・7・16～11・24）、〈聖処女〉（昭10・8.23～12・25）、〈女の図〉（昭10・3～11・9）、〈戦へる女〉（昭11・2～初夏）等である。

実は、その「市井鬼」たる人物とドストエフスキーの影響との関係について、昭和九年九月二、三、四日にわたって、犀星本人は〈小説中の人物〉（『時事新聞』）という題で、「一 スギドリガイロフの邂逅」、「二 スギドリガイロフの自殺」、「三 ドストエフスキの軍隊」に分けて連載し、さらに〈復讐の文学〉（『改造』昭10・6）、〈衢の文学〉（同前、昭11・6）などと、一連の文章で自ら紹介しているし、多くの学者にも、「犀星のドストエフスキ体験が消化され、姿を変えて噴出するのは、中年期の長いスランプを脱し、『あにいもうと』などの一連のいわゆる市井鬼物と呼ばれる小説によってである」¹⁹⁾ と詳しく論究されている。ここでは、悪い人からも「善」を見いだし、彼らに救済を与えたことだけを見る。

例えば、〈戦へる女〉の中に出た神部、鴨居及び好文館主人の三人の人物像は、「スヴィドリガイロフをその原型とするものである。すなわち、彼らはスヴィドリガイロフを元祖とする人間原型のいわば矮小化された末裔にほかならない。」²⁰⁾ 昔の恋文をネタに女から脅し金をせしめようとする鴨居に、ある日一枚の肖像画に見入っている赤子を抱いた女性の、母親らしい優美さに柄にもなく感動の涙を流させたり、さらに何人もの女性の肉体をつけ狙う三文文士神部のために、物語の最後には彼の被害者の一人に、神部は余りに孤独であったのだと弁護させたりする。特に鴨居は、火渡毅がみや子に好意を持っていたが、自分の流したデマに拘っていることを知り、「みや子は純真であつたといふことで、きさまはもう充分援つてゐるぢやないか！」と火渡に説明したり、最後にみや子達の店に行つて、「僕はあなたには何もしなかつた。僕はそれを恰も僕が為し得たことのやうに云つたのは僕の嘘つきがさういはしめたのです」と皆の前でみや子の純潔を証明したりした。なぜなら「苦痛はこの無頼漢の心臓を搾めつけてゐるやうであつた」からである。ドストエフスキー的小説世界への突入を試みたこの小説は、「むしろドストエフスキーを意識して、力みすぎているところが目立ち、生硬未熟な印象を残すものとなっていると言わざるを得ない。」²¹⁾

この時期のほかの小説にも、似た人物像もたくさんある。〈女の囚〉の伴八は極道で昔女房ハナを淫売に売ったことまである男だったが、今は真っ当になろうと努め、ハナの手で妾に出されそうになる養女はつえを護ろうとしたり、「今は憐憫も友情もそして女としての愛を失うてゐて、只、憎悪ばかりが募つてゐることが感じられた」妻のハナを殺そうとしたりした。〈復讐〉では、最後の章において女性を不幸にした二人の男には、自分が良心の呵責を受けていることを告白させ、その過去を恥立ち直らせようとした。

小説にだけでなく、自叙伝〈弄獅子〉（昭10・1）において義母へも救済を与えた。最も注目すべきものは、亡くなった義母が地獄を素通つて極楽往生して、「極楽の園生にある木馬の上で、大勢の天使達と遊び戯れてゐた」という空想の場面である。つまり、地獄の代わりに救いと極楽を義母に与えた。大家として文壇に認められた犀星は、義母を単なる嫌悪の対象としてではなく、義母を中心とした「血統」の問題を、自分一人の問題としてではなく、自分の周囲にまで広げ、さらにはその義母の像を本能的に生きた一人の「残酷で無学な」「市井鬼」として普遍化し、「市井鬼物」の世界にまで押し広げようとした。

このように、ドストエフスキーの影響で、犀星は「いかなる人間の中にも善悪半分あつての魂がある。悪の働いてゐる間は善きところは遠のいてゐるし、善き心の働いてゐる間は悪心が遠のいてゐる」（〈復讐の文学〉）という人間観を形成し、それを作品に反映し

て、悪どい市井鬼達から善人の魂を見つけ出そうとしている。言い換えれば、これは、彼自身の持っている善なる魂への自負の、形を変えての表われだと言えよう。

3. 犀星の文学生涯を底流した「キリスト教的感覚」

「キリスト教的感覚」は、ずっと犀星文学を底流していて、機会がある度、湧き出るものであった。昭和十二年四月十八日～五月六日の間、『朝日新聞』社の要請に応じて、犀星は生涯唯一の外国旅行、中国東北地方への旅に出かけたが、それは観光ではなく、「古き露西亜」の面影を求めるためであった。茫々たる大河スングアリー（松花江）の岸に立って、対岸に広がる草原を望むと、自分の心の中にある「古き露西亜」が蘇ってきた。日本海沿岸の古都金沢の生まれで、少年時代から日本海を隔てたすぐ向こうのロシアに特別な関心を持ち、とりわけ東京放浪時代に親炙したトルストイやドストエフスキーの小説の影響で、犀星はずっと帝政時代のロシアに憧れをもっていた。ハルビン市内のキタイスカヤ通りや、ソフスキー寺院、ニコライエフスキー寺院など数多くのロシア正教の教会などは、犀星には小説中の人物やそこに描かれた町の名前とともに心に蘇らせ、「古き露西亜の空気」を感じさせ、「古き露西亜の思ひ」を湧かせ、「遠き露西亜の空気を愛せんと」させたのである。

また、この時期の詩作にも「娼婦愛物」がたくさんある。『哈爾浜詩集』所収の「終日淫をひさげり/終日あをざめて睡れり/笑はんとすれど笑ひを失ひ/哀しまんとすれど悲しみを失ひ」〈山査子〉と、「女ありて深く睡れり（中略）/その顔うごかさざるなり/うごかば鬼のごとく見ゆ/うごかば恐ろしきなり」〈南京豆〉などのように、初めての異国への旅なのに、名勝旧跡を回らずに、人間的感情を一切喪失し、生命を維持するためのぎりぎりの線上を生きているかのような生態に強いられた異国の娼婦に、彼はソーニャを見出していたに違いない。

最後に、彼の〈大陸の琴〉が挙げられる。小説の主人公兵頭鑑は、ゆえあって慈善院に捨ててしまった我が子探しに再び満州を訪問する。しかし、あちらこちらと回ったが、中国人が建てた「我善堂」にもロシア人経営の孤児院「ロスキイ・ドモ」にも、日本人の子を預かった記録はない。どん底から立ち直り、功成り名遂げたらしい兵頭だが、二つの慈善院に多額の寄付をする以外何もできず、悔しみにまみれて帰国してしまう。兵頭鑑の棄子捜し行為は、生涯を通じて裏返しされた犀星の「孤児意識」が物語化されたものであるが、主人公の哀愁を帯びた懺悔、重苦しい罪の意識、身を責めての告白は、明らかに「キリスト教的感覚」によるものである。

終わりに

明治維新後、「宗教学的宗教観念」の確立と普及もあって、トルストイ、ドストエフスキーの文学作品をはじめとするロシア文学は疾風怒濤のように日本を風靡する中、キリスト教は、多くの作家に多大な影響を与えた。幼少時より宗教に強く影響された犀星の作品は、キリスト教やトルストイ、ドストエフスキーに色濃く影響されたのは想像できる。しかしキリスト教への信仰を通じて贖いを求めるクリスチャンと異なって、「この宇宙にあるものはみな正しい。それが自分のやうな汚れたものにとつては、たまらなく苦悶を感じさせる。その正しいものをとりいれて能くこなして、自分も又美しいそれらの最上な潔い意志によつて営みたい（下線は筆者）」（『愛の詩集』の〈自序〉）とあるように、彼は、「この宇宙にある」もっとも「正しいものをとりいれて能くこなして、自分も又美しいそれらの最上な潔い意志によつて営むため、創作を通じて「自分を救ひ/自分を慰め/よい人間を一人でも味方にする」（〈何故詩をかかなければならないか〉）を図り、大正時代に、汚れなき魂の所有者として憧憬したソーニャなどの主人公が登場したドストエフスキーの作品に同感し、都会を彷徨する「虐げられし」者の意識を抱き、創作に励み、また昭和十年前後、「市井鬼」から善い魂があることを信じて、自分を清めたりすることを通じて、自分の心に絡んだコンプレックスから脱け出そうと努力したのである。それは、ずっと犀星の文学創作を貫き、彼の向上意欲を催し、支えていったのである。

注

- 1) 犀星〈幼年時代〉に、「石ころ同様なもの（筆者注 地蔵様）の中に、何かしら疑ふことのできない宗教的感覚が存在してゐるやうに信じてゐた」という言い方がある。ここで、この「宗教的感覚」という言葉に倣って、「キリスト教的感覚」という言方を作る。キリスト教だけではなく、彼は、仏教にも深く影響されている。詳しくは、拙稿「犀星における仏教の影響とその意義」（『室生犀星研究』第34輯 室生犀星学会 2012・10）を参照。
- 2) ここの「宗教学」とは、姉崎正治が主張したものである。彼は、自由神学などはキリスト教の立場を前提とするのに対して、諸宗教の枠組よりも、それを超えた人間精神の産物としての「道徳の規範」に宗教の本質を置いてそれを優先させ、自由神学からは宗教に理解をしめず立場を、国体道徳論からは教団の枠を超えた国民意識の確立をめざす立場を継承し、その両者を融和させようとした。言説として確立された宗教学的宗教観念は、日清・日露戦争後に急速に成長されてゆく日本的な国民国家形成の文脈の中で受容され、一つの到達点となり、多くの知識人に影響を与えた。
- 3) 室生犀星のコンプレックス及びその脱出努力に関して、『神戸女学院大学論集』及び『室生

『犀星研究』掲載の一連の拙稿を参照。

- 4) 中島賢介「室生犀星論」『北陸学院短期大学紀要』第36号（2004）37頁。
- 5) 田辺徹「室生犀星 もうひとつの青春像」『犀』20号（平14・10）を参照。
- 6) 稲垣広和「聖書」『室生犀星事典』（葉山修平編集 鼎書房 2008）572頁。
- 7) 室生朝子, 本多浩, 星野晃一『室生犀星文学年譜』（明治書院 昭57）378頁
- 8) 新城和一「はしがき」『ドストエフスキイ 人・文学・思想』（愛宕書房 昭18）
- 9) 前掲注7, 378頁。
- 10) 安元隆子「室生犀星のドストエフスキイ受容」日本大学『国際関係学部研究年報』第32集（2011）5頁。
- 11) 木村幸雄「室生犀星におけるドストエフスキイ受容について」『言語と文芸』第106号（平2・9）153頁。
- 12) 詳しくは、拙稿「犀星における『娼婦愛』」『室生犀星研究』第30輯（室生犀星学会 2007・10）を参照。
- 13) 福永武彦「解説」『日本詩人全集15・室生犀星』（新潮社 昭48）312頁。
- 14) 久保忠夫『室生犀星研究』（有精堂 1990）199-200頁を参照。
- 15) 三好達治, 中野重治, 窪川鶴次郎等編『室生犀星全集』第一巻（新潮社 昭39）498頁。
- 16) 前掲注4に同じ。
- 17) 前掲注14, 202頁。
- 18) 前掲注11, 145頁。
- 19) 安宅夏夫編「人と作品」『日本の詩 室生犀星』（ほるぶ出版 昭58）450頁。
- 20) 前掲注11, 151頁。
- 21) 前掲注11, 152頁。

*本稿は、中国教育部人文社会科学研究企画基金プロジェクト「思想と社会転換期文学変遷考」（11YJAZH05）とそれを発展的に引き継ぐ中国広東省人文社会科学研究プロジェクト「中日『あはれ』の文学比較研究」（11ZGXM750010）の助成を得ている。